シャーロック・ホームズからの依頼

デウムデウム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シャーロック・ホームズからの依頼

【Ｎコード】
Ｎ０３６２Ｄ

【作者名】
デウムデウム

【あらすじ】
平和な日々をおくる美神令子除霊事務所に一人の客が訪ねてくる。

プロローグ

妖怪・幽霊・魔物・悪魔…それら人外を始末する掃除屋、通称ゴーストスイーパー…

世界でも名の知れたゴーストスイーパーである美神令子の事務所では、いつも通りの平穏な暮らしが行われていた。

「あ！おキヌちゃん、そこの洗濯ものもお願い。」

彼女の名は、美神令子。

この除霊事務所の所長であり、世界でもトップクラスのゴーストスイーパーである。

「美神」の名の通り、ヴィーナスを思わせるその容姿に目を奪われない男はいない。

しかし、その性格は…

「はーい。」

彼女の名は、氷室キヌ。

元はある妖怪を封じるための人柱であったが、美神などの協力により、反魂に成功し幽霊から人間に戻る。

元は生霊とはいえ、長年幽霊であったことから、幽体離脱やネクロマンサーの能力も持っている。

「たまには、自分でやった方が…」

彼の名は、横島忠夫。

彼がナレーションをやってもいいのだが、おそらく、彼の場合、女性陣と自分のみを美化し、他のメンバーなどいなかったことにしかねない。

彼は、元々、煩悩というある意味純粋な気持ちでこの事務所に入った。

入った当初は、霊能力など微塵も見せることはなく、おとりや荷物持ちといった仕事を任されていた。

しかし、数々の死闘や愛する者の死を超え、彼は、強くなった。
性格はあいかわらずであるが…

また、この事務所、人工幽霊の館であるためか、妖精や人狼・妖狐などの人外も住み着いている。

「うるさいわねー！」
横島が美神に制裁という名の正拳突きをくらったとき、ドアが鳴った。

客の訪問…彼らの平穏は終わった。

その1

美神令子除霊事務所に現れた客、それは…

「…ということなんだ。事務所のことは、隊長が責任を持って管理してくれるそうだ。」

彼の名は、西条輝彦。

ＩＣＰＯの超常犯罪課（通称オカルトＧメン）の捜査官であり、横島の目の上のタンコブである。

「それで？そこに出た幽霊を始末すればいいの？場所が場所だから、警察じゃやりにくいかもしれないけど、警察の方が何かあったときに対応に困らないんじゃない？」

「いや、そうじゃない。そんなことであれば、ここに…少なくとも、彼に頼むような真似はしない。」

「西条！」

「まあまあ、横島さん。」

「それじゃ…」

「そこに出たというのが、マイクロフト・ホームズの霊でね。」

「マイクロフト・ホームズ！？」

「え？ホームズって、あれですか？推理物とかで名探偵のいい例としてあげられる。」

「ええ。マイクロフト・ホームズは、その兄よ。しかし、実在していたなんて…」

「ああ。オカルトＧメンの関係者でも一部の者しか知らない。なんたって、マイクロフト・ホームズがイギリスのスパイ組織の父…彼自身がイギリス政府といっていい存在なんだからね。」

「イギリス政府がその存在を隠すために、架空の人物としたわけね。」

「ああ。そのときにはノンフィクション小説『シャーロック・ホー

ムズ』は存在したからね。」
「利用されて、フィクションとなったわけか…」
「ああ、せっかくの功績をね。」
「ん？たとえ相手がマイクロフト・ホームズでも、幽霊なら、除霊すればいいんじゃ？」
「いや、彼は悪霊ではない。ただ、弟であるシャーロック・ホームズからの依頼を伝えるために出てきただけだ。」
「シャーロック・ホームズからの依頼？」

その2

静まりかえる除霊事務所のメンバーを尻目に、西条は話を続ける。
「イギリスで未解決事件と言えば、まず何を想像する？」
「切り裂きジャック！」
「そう…」
「でも、それは、タマモとシロの活躍で、妖刀の仕業ということがわかったんじゃ？」
「ああ。ホームズも、霊能力があったようで、そこまではつかんでいたらしい。しかし、事件には黒幕がいたんだ。」
「黒幕？」
「ジェームズ・モリアーティ教授とその部下セバスチャン・モラン大佐…」
「モリアーティが死んだときも、モランが逮捕されたときも、ホームズがその事実に気付くこともなかった。しかし、その後、獄中のモラン大佐がモリアーティの組織の残党に指令を与えていたことにホームズが気付いたことによって、事は露見する。…彼らがやろうとした恐ろしい計画…それは、妖怪の研究だった。ホームズは、それに気付く事はできたが、その本部がどこにあるのかは、全く解らなかった。」
「妖怪の研究…」
「そして、その研究は今も行われ続けているらしい。」
「それを阻止すればいいわけか？」
「ああ。だが、過去へ行って阻止してもらう。」
「なんでわざわざ？」
「…なぜなら、現代においてその妖怪たちは、魔族の軍隊ですら手が出せないほどの勢力になっているからだ。」
「そんな妖怪たいが今までどこに？」
「それは…あそこへ行けばわかることだ…君たちには、まず、マイ

クロフト・ホームズの霊に会ってもらおう。」

その3

イギリス某所…

ＭＩ６やＭＩ５などのイギリスのスパイ組織を統括する地下施設…

そこにいる初代Ｍこと、マイクロフト・ホームズ。

「…例のゴーストスイーパーを連れてきました。」

「よくぞ来てくれた。私の名は、マイクロフト。…性格には、その霊だが。弟からの依頼は、そこにいる西条君から聞いていると思う。」

「ええ、しかし…」

「問題は、敵の勢力だけじゃない。その本拠地だ。…敵の本拠地は、ヴァチカン。当時の内部にモラン大佐の関係者がいたらしい。しかも、相手は結界を張っていたようで、本部がわかったのすら、つい最近のことだ。…君たちには、過去へ行って我が弟に協力してもらいたい。」

「ええ。で、報酬の方は…」

「妖怪の軍団が滅ぼせるかどうかというときに呑気なものじゃの。」

彼の名は、カオス。

天才的な錬金術師であり、不老不死の能力を手に入れたヨーロッパの魔王。

「そうですよ。美神さん。」

彼の名は、ピエトロ・ド・ブラド―伯爵の実の息子である。

かつて世間を騒がせたブラド―伯爵の実の息子である。

「…ド…ドクター・カオス！それに、ピート！」

「何？こいつらも一緒に連れていくの？」

「いや、隊長の案でね。その時代に存在した彼らなら、歴史が変わ

ったとき、それに気付くはずだと。上手くすれば救援を呼ぶこともできる。」
「ちょっと、待ってよ。報酬無しじゃ、私動かないからね。」
「それは心配することはない。オカルトGメンが責任を持って支払おう。」
「…なんか、ママにまるめこまれそうな気もするけど、仕方が無い行くわよ。横島くん、おキヌちゃん。」

その4

イギリス…

「さあ、着いたわよ。」
「相変わらず、乱暴な着陸ですね。」
「仕方ないでしょ。私とママの力で時間超えたんだから、私にコントロールできない部分も出るわよ。」
「はあ。」
「さあ、まずは、現代との連絡の手段としてピートを探すわよ。」
「え？ドクター・カオスは？」
「いや、あのじいさんじゃ、現代まで記憶保てない可能性あるでしょ？それに居場所わかんないし、ピートなら絶対あの島でしょ？」
「はあ。じゃあ、現代にいたときに言ってあげればよかったのに…」

「いたたたた…」
「あ、おキヌちゃん、今頃気付いたのか…そっか、おキヌちゃん、時間移動慣れてないものな…」
「そうなんですよ。」
「じゃあ、気をつけることを一つ教えておこう。過去の人間に不必要に関わってはいけない。おキヌちゃんは人がいいから注意しなくちゃ。」
「え？どうしてですか？依頼のためや目的のために仕方ない場合は除いて、人と関らない方が無難なんだ。例えば、今から行こうとしているブラド一島の吸血鬼が仮にまだ人間を全く知らなかったとしよう。そこにいきなり守銭奴で冷血な美神さんと出会う。当然、その吸血鬼は人間全員がこうなんだと思ってしまい人間不信となり、未来が変わって、敵となる妖怪が1体増えてしまうわけだ。」
「ヨ～コ～シ～マ～！」

「あ！冷血鬼…じゃなかった、美神さん。」

その日、イギリスに血の雨が降ったという。

「まあ、横島君の言うことも一理あるわ。変に関わって未来がどうなるかわかったもんじゃないんだから。」

「あの～、だったら、すぐにここから離れた方が…」

「え？なんで…！！」

その時代に合って無い格好のまま路上で大騒ぎをする美神たちは、市民の注目をあびていた。

「逃げるわよ。二人とも…」

その5

森の中で逃げ込んだ3人…

「えっと確か、ドクター・カオスが用意した衣装がどこかに…」

美神は、横島とともに、バックの中を探している。

「これじゃないですか？」

「あ、それそれ。…あれ？」

「どうしたんですか？普通の衣装じゃないですか？」

横島の言うように、そこには、普通の衣装が3着。

「いや、展開からいって、服あたりでいったんオチが来るかなと思ったんだけど。」

「そんなこといいじゃないですか。」

「いや、油断はできないわよ。カオスのことだから、服に高性能ライフル仕込んであるとか。」

「そんなことないですって、仕込んでて、電自動歯ブラシとかですって。例えば、ここのボタンとこのボタンを同時に押せば…ドワー！」

美神の予想通り、そこには高性能ライフルが…

「何してんのよ。」

「何って、美神さんが…」

「もう、逃げるわよ。」

「え？またですか？」

逃げた先には、船が…

「しめた！そのままあの船いただくわよ。」

「え？いいんですか、そんなことして？」

「いいんじゃない？少年誌じゃないだし…」

「はっ！（少年誌じゃない→それまでできなかったこともできる→垣根を超えるチャンス）美神さん、ボカァ、もう…」
「はいはい。やると思ったから言ったのよ。その煩悩で文殊「破」作っておきなさい。」
「え？「破」ですか？」
「ええ、今はまだ、ブラド一伯爵は眠っているけど、その結界は働いているはずだからね。」
「解りました。はあ…」
文殊…それは、漢字一字の特性を持つ力が出せるという霊能力。

その6

ヨーロッパ某所…

吸血鬼ブラド一伯爵の住むとされる島…
横島により、結界は破られ、3人は島に上陸する。

「さて、どうやって、ピートを探しましょうか…」
「ふっふっふ、簡単ですよ。」
「ん？自信ありげね。どうする気？」
「島の住民に聞くんですよ。」
「あんた、それ、避けた方がいいって言ってたじゃないの？」
「あ、いや、でも、この場合仕方ないですし、もう…」
「ん？「もう」何よ。」
「もうすでに、おキヌちゃん聞きに行っちゃいました。」

「…エリスちゃんって言うんだ。ね？ピートさんがどこ行ったか知ってるかな？」
「イギリス…」
「へ？いぎりすのどの辺りかな？」
「ロンドン…ヘルシングっていう教授がドラキュラ伯爵を倒したっていう噂を聞いて、ブラド一伯爵を倒してもらおうと探しにいったみたい。」
「ありがとね。」

「イギリスのロンドンか…」
「なんか、無駄足になちゃいましたね。」

「そんなことないわよ。」
「へ？」
「忘れたの？ピートが依頼に来たとき、国宝級の宝持ってきたじゃない。おそらく、それがあるのは、ブラドーの城よ。」
「まさか…」
「乗り込んで、貰っていきましょう。」
「やっぱり。…それは、やめときましょう、美神さん。そんなことしてる場合じゃないんですし。帰るとき、そんなの持ち帰ったら、歴史変わっていてもお母さんにバレますって。そんなことより、依頼を遂行して、報酬をもらった方がいいでしょう。」
「なんか、あんた、今回妙にまともね。まるで映画版ののび太みたい。」
「いや、スパイって、やっぱり男の憧れじゃないですか。紛いなりにもそこからの依頼なわけですし。もし、これで活躍でもしようものなら、「ボンド。アイム、ジェームズ・ボンド。」と言える日が来るかもしれませんし。」
「どこまで女性に弱いジェームズ・ボンドなのよ。あんたは、できて寅さんよ。」

その7

イギリスロンドン…

そこにある某大学…

ほんとに、こんなところに、ピートいるんですかね？

「ヴァン・ヘルシング教授って言ったら、ここの教授のはずだからね。まあ、ヘルシング教授がブラドーのことを書き残していないあたり、会えなかったのかブラドー討伐に失敗したのかはわからないけど。」

「へえ。」

「確か、唐巣神父や美神さんとかも、ヘルシング教授の授業を受けたことがあるとか？」

「それは、ヴァン・ヘルシング教授の息子よ。」

「俺も、今度受けた方がいいですかね？」

「いや、もったいないわよ。あんた、ピートで吸血鬼のこと、だいたい理解してるでしょう？イギリスに行くのも講議受けるのもただじゃないんだから。あんたは、学校の授業とか寝るんだから実戦で学んでいくしかないでしょ。」

「イテ！」

美神たちが話ながら歩いていると一人の男にぶつかった。

「何じゃ？お前ら、ちゃんと、前を見て歩かんか。」

彼の名は、カオス。

「ド…ドクター・カオス！なんで、あんたがここにいるのよ。」

「なんでって、ワシは、ここで昔教師をしとったからの。今日は、ヘルシング教授の代わりに臨時の講師として来ただけじゃが。昔で言えば、今有名なあのシャーロック・ホームズもワシの生徒じゃっ

たんじゃぞ。まあ、彼にはその後助けてもらいもしたが…む？お主ら、すさまじい霊能力を持っておるの。特に、そこのボーズ。」
「肉体を交換するつもり？」
「む！何故、それを？」
「生憎、あたしたちは未来から来たの。あんたのやろうとすることなんて全てわかっているわ。」
「…「未来から」…待て、何か思いだしそうじゃ…！…そうじゃ、お主ら、前にもワシの前に現れたじゃろ？」
「前にも？」
「そうじゃ、マリア姫を救出する際、手伝ってくれたではないか。」
「ああ、そっか。それよりはここは未来だから、その記憶はあるわけか。」
「あのときの恩もある何か手伝うことがあったら言うてくれ。ここじゃ、なんじゃ。まずは、研究所に案内しよう。

その8

イギリスロンドン地下…

「おーい。マリア、帰ったぞ。開けてくれ。」

「イエス。ドクター・カオス。」

彼女の名は、マリア。

ドクター・カオスの魔法科学の結晶とも言える究極のロボット。

「マリア！」

「マリアがいれば、確実に覚えてるだろうし、ピートの助けはいらないかもね。」

「どうしたんですか？確かに、俺としても美形のキャラクターは欲しくありませんが。」

「いや、もし、このときのピートがドクター・カオスと接触しちゃたらと思うとね？」

「何か問題でもあるんですか？」

「この時代のピートは、ブラドー伯爵倒すためにいろいろ廻ってるんでしょ？ヘルシング教授とかのとこを…」

「そうですね。」

「それでも、倒せる者が見つからずに、あの事件のときに、私やカオスに頼むことになる。」

「そうでしょうね。」

「それでね。今、二人が接触して、数百年前にブラドー伯爵をあそこまで追い込んだのが、カオスだってことを知られると、現代までの間にピートとカオスでブラドー伯爵倒してしまってあの事件がなかったことになるかもしれないでしょ？」

「確かに。」

「そうなると、あのときの報酬も消えちゃうでしょ？私の残高から数字が変わっていくってなるかもしれないじゃない。」

「バック・トゥ・ザ・フューチャーの写真とかがいい例のアレですね。…美神さん、俺としても美形キャラはよけいな存在ですし、協力させていただきます。」
「あ！美神さん、ピートさんがいらっしゃったみたいですよ。」
「へ？」
「え？なんで？」
「お二人とも何か真剣に話し込んでたみたいなんで。カオスさんに事情を説明して、マリアさんにピートさんの特徴を教えて、探してきてもらったんです。」
「何、マリアにかかれば、吸血鬼と人間を見分けるなぞ、簡単じゃ。のうマリア？」
「イエス、ドクター・カオス。」

ホームズサイド　その1

ベーカー街…

「どうしよう、ホームズ？この事件を書くとすると、首相とヨーロッパ担当相から極秘裏に受けたあの依頼外交文書紛失事件について触れなければならなくなる。」

「また、嘘で埋めておこう。ときには矛盾があった方が、この物語を読者が嘘だと思ってくれるはずだ。」

「まあ、君がアドラーと幸せに暮らしているなんて、誰も思わないだろうからね。」

「そうさ。君が残した小説も実在するのかしないのかわからなくなってくるほどに時間が全てを隠してくれる。」

「時間か…」

「ああ。思えば、長い時間が過ぎたものだ。ワトソン、僕はもうすぐ、探偵業を引退するだろう。」

「いきなり、何を言い出すんだ？」

「長い時間は過ぎた。だが、モリアーティを倒し、アドラーに出会うまで、僕の時間は止まっていた。あの第2の危険人物も今や獄中だ。もうそこまで、僕が手をやくような事件はないだろう？スコットランドヤードでも解決できないこともないさ。」

ホームズは、確かにモリアーティ絡みの事件でないと退屈そうな表情を見せていた。

そのホームズが、アイリーン・アドラーによって、活気を取り戻したのだ

…事件ではなく、女性によって。

もうこの街にそれほどの事件は起きないのかもしれない。

そのとき、1本の電話が鳴り響いた。

ホームズの目が一気に輝きはじめた。

「事件かい、ホームズ？」
「いや、正確には、そうじゃない。大佐がついに白状したよ。」
大佐…セバスチャン・モラン…
あのモリアーティの１の部下と言っても過言ではない。
その大佐が何を？

ホームズサイド　その2

イギリス某所…

何の目的で建てられたのか不明な頑丈そうな地下施設…

そこにいるホームズの兄こと、マイクロフト・ホームズ。

「こんなところに、モラン大佐が？」

「ああ。彼の情報は、あまりにも重大すぎたからね。」

「その情報といういうのは？」

「妖怪を意のままに操ろうとしたモリアーティの計画だ。」

「モリアーティだって！？」

「ああ。吸血鬼以外にも目をつけていたんだろう。妖怪の洗脳と改造。成功すれば、兵器として売っていたのか、それとも自分の軍でも作るつもりだったのか…」

「さあ、モラン、計画の本拠地を教えてもらおうか。」

「フ…獄中での通信手段を言い当てたのはすごいが…あの方はそこまで読んでいた。」

「あの方？モリアーティか？」

「ああ。…そうだろ、ジョージ・クレイ？」

そのとき、一発の銃弾が大佐を貫いた。

「お前の負けだ、シャーロック・ホームズ。あの方の頭脳に勝てる方などいないのだ。」

大佐は死んでいった。

「確かに。私の負けだ。モリアーティとモランがいなくなったロンドンでの私は…再会したアドラーによって自殺までは免れたが、おそらく、僕の力が無くなるのは、モリアーティが予想した通りなのだろう。今まで、大佐が口をわらなかったのも、そう指事されてたんだろう。」

「…追おう、ホームズ！まだ、さっきの狙撃犯が残っている。」

「無駄だよ。僕が尾行に気付かなかったほどだ。それにあの名前、おそらく、ジョン・クレイの子供なのだろう。」

私が気付いたとき、私はホームズを殴っていた。

「諦めるなんて君らしくもない。君は、事件に妥協を許さないんじゃなかったのか？」

「ああ。すまない。…やつを追おう。…兄さん、もし、犯人のアジトがわからなかったときは、そのときは…いや、兄さんでもダメかも知れない。モリアーティの最後の計画だ。だが、いずれ動く、動けば必ず尻尾はつかめるはずだ。…そのときに時空転位でも何でもかまわない。その計画を阻止してくれ。」

私たちは、狙撃手の後を追った。

ホームズサイド　その3

イギリス　ロンドン　カーファックス屋敷…

狙撃手の足は、異常に速く、馬車に乗って、やっと追い付いた。
「待て！…ジョン・クレイ。これが、お前の父親か？」
狙撃手の動きがピタリと止まった。
「アア。」
「そうか。」
「会エテ。ヨカッタよ、ホームズ。」
そう言うと、男の姿は…背中からコウモリのような羽を生やした。
「吸血鬼か！？」
「いや、ワトソン、吸血鬼なら会ったことあるだろ？吸血鬼ならそんなことをしなくても飛べるはずだ。」
「ソウダ…オ前二動物霊ノ力ヲ融合シタノダ。」
そういいながら、男が姿を変え続けた。
男の翼は、はばたいただけで強風を呼び、私たちを圧倒させた。

「…もし、妖怪に対して無知ならば、ここで殺されていただろう。そういった意味では、あのドクター・カオスに感謝しなければなるまい。」
ホームズは、ケースから精霊石を取り出し、銃弾にして撃ち込んでいった。
「効カン。」
ホームズの腕は確かなのだが、いかんせん、相手が化け物だった。
「ああ。今は、置いているだけだ。」
そう言い、ホームズは、何か呪文を唱え始めた。
「今、5発の銃弾がお前の中にある。ゴーストスイーパーが本業で

はない僕にはこれが精一杯でね。」
「コレデ終ワリカ？」
「いや…もうすぐ、その５つの精霊石が亜空間への道を開く。体内にそれができるお前は当然…」
「何？ヤメロ！」
「言っただろ？大事な証人を無くすのは惜しいが、ゴーストスイーパーが本業ではない僕にはこれが精一杯でね。…極楽へ行きたまえ。」
男は、光りに包まれながら、どこかへ消えていった。

ホームズはその後、モリアーティの本拠地をさがすため、ロンドンをしらみ潰しに廻っていった。
アイリーン・アドラーとは疎遠になり、彼女は、どこかへ消えてしまった。
噂では、ホームズとの間に子供もいたらしい。
仮にウルフとでも呼んでおこうか。
彼の話は、また、別の誰かがしてくれるだろう。
なんといっても、シャーロック・ホームズの息子なのだから。

その9

イギリスロンドン地下…

「…なるほどの。モリアーティのやつめ。わしの研究を狙うだけでなく、そんなことまでしておったとは…」
「いや、おっさん。あんたなら、機会があれば、同じ事してただろう？」
「ん？あーまー、確かにやってみたい研究ではあるが…」
「何よ。結局同じじゃ無い。」
「許せない！妖怪や霊をそんな道具みたいに！」
「お前、昔からそんな熱血だったんだな。唐巣のおっさんの影響じゃねーんだ。」
「行きましょう、皆さん。こうしている間にも、妖怪たちが…」
「そうね。まずは、ホームズのところに行きましょう。」
「ノー　ミス・美神。」
「そうじゃった。ホームズには、もう会わぬよう言われとるんじゃった。」
「いったい、何やらかしたんだよ！？」
「もう！この非常事態っていうのに！仕方が無い。向こうから来ればいいんでしょ？ピート、あんたも知り合いなんでしょ？連れてきて。」

思えば、あのとき、彼が現れなければ、我々は、一向にモリアーティの本拠地に辿り着かなかっただろう。
ホームズの実力の問題ではない。事実、変わる前の歴史ではそうだったのだ。

「ホームズさん、ワトソンさん、お久しぶりです。」

「…！ピートくん！」

ピートくんの話を聞き、我々は、再びカオスのもとへむかった。

本来の歴史であれば、再会すらできなかったのだろう。

再会したいと望みもしなかったが。

いや、望まなかったと言えば嘘になるか…

カオスなら、今回の事件の役に立てる。

それに、このマリアという人造人間の美貌は、もう一度見る価値があるものであった。

そして、初めて出会った美神という女性とキヌという女性…二人ともそれぞれ産まれ持った美しさというものを持っていた。

話がそれてしまったか。言っておくが、私はホームズの言うほど女性好きではない。

その１０

イギリスロンドン地下…

「いや、本当にわざとでは無いんだ。ただ、そこにお尻があったというか…」
「おっさん、「そこにお尻があるから」なんて、どんだけ変態なんだ？」
「あんたが言うか！？」
「言葉の一部のみ取らないでくれ。…ホームズ、君も何とか言ってくれ。」
「いや…ワトソン、君は確かに女性好きだよ。この前も、そのことに腹を立てた夫人が、君の名を「ジョン」ではなく、「ジョージ」と言っていたではないか。」
「ああ、まるで僕ではないかのようにね。…あれには、ショックだったよ。」
「みなさん、話を戻しましょう？」
「あ、すまない。ピートくん。」
「…つまり、本拠地はヴァチカンにあると？」
「ええ。」
「では、どうする？あそこだと、内部に入るのも一苦労だろう？」
「民間人ならね。ゴーストスイーパーなら、この当時、霊能力がパスみたいなものだから。」
「あー、すまんが、それは無理じゃ。」
「え？どうして？」
「ワシ、おそらく、ブラックリストに入れられておる。」
「だから、何したんだ、あんたは！？」
「仕方ないわね。おそらく、ピートもブラドーと瓜二つってことで怪しまれるでしょうし、ホームズさんも顔が知られてる可能性があ

るから…ピートとカオスとホームズさんとワトソンさんと横島くんとで別の潜入方法をやってみて？」
「え？なんで俺まで？」
「未来知ってる人間いないと困るかもしれないでしょ？それにあんたヴァチカン行ったことあるでしょ？」
「あったっけな？」
「こんバカチン！」
「ああ、はい。ありました。ありました。」
「何も、殴らなくても…」
「で？別の方法っていうのは？強攻突破よ。」
「それ、自分がやらないからって…」
「いいじゃない。ＭＩ６にいいとこ見せる事できるわよ。」
「はいはい。わかりましたよ。」

その11

ヴァチカン…

「横島さん、大丈夫でしょうか？」
「大丈夫よ。あいつの煩悩は伊達じゃないでしょ？」
「ええ、でも、女性は全員こっちに…」
「あ、そういや、そうね…ま、カオスもピートもいるし、なんとかなるでしょ。」

「強攻突破とは言ったものの、そんあことをすれば、敵の兵だけでなく、ヴァチカン自体の軍も動き出すじゃろう。」
「ああ、おそらく。」
「そこでじゃ、ここはあえて、ヴァチカンの警備の固いところを攻める。」
「何でまた？だいたい、どこ何です？法皇のとこですか？」
「そうか！あのパンドラの箱のラプラスとかがいるところか？」
「よう知っとるの。そこを完全に破壊してしまえば、今度の騒ぎ以上のものになってしまうじゃろ。」
「っていうか、そんなことしたら、いきなり、人類滅亡じゃねーか。」
「じゃから、軽くでいい。」
「なるほど。それほどのものならすぐに兵が集まってくる。それどころか、それに集まらない兵はモリアーティの兵という疑いを持てる。」
「そうか。」
「いや、そこまでは考えておらんかった。なるほどのう。」
「へ？あんた、まさか、目的忘れて、ヴァチカン落そうなんて考え

てたんじゃないだろな？」
「いや、昔、そうやったのを思い出してると、ついな…」

「横島さんたち、大丈夫ですかね？」
「おキヌちゃん、そればっかりね。そんなに心配？」
「そういう美神さんだって、心配そうじゃないですか。」
「ッイヤ、そ、そんなことないわよ。」
「…！そ、そう言えば…」
「どうしたの？」
「今、私たちって、何語で話してるんですかね？」
「お、おキヌちゃん、そんなのツッコまなきゃ、わかんないんだから。バレたとしても、カオスが自動翻訳機作っていたなりいろいろ考えられるんだから、ツッコんじゃダメ。」

その１２

ヴァチカン内部…

「しかし…」
「ああ。これほど兵が来るとはな…」
「ええ。これじゃ…」
「違う行動を取るものなんてわからんな。…というか、逃げ切れそうにない。」
「なんじゃ？何を驚いておる？ワシが昔攻め込んだときは、もっとすごい人数が来ておったぞ？」
「早よ言え！」

「しかし…」
「どうしたんですか？」
「エミとか連れてきとけばよかったわね？」
「え？どうしてですか？」
「いや、アイツなら、語尾で、すぐ、判断つくじゃない。」
「そうですね。」
「ン？なんか、騒がしいわね。マリア、ちょっと、見てきてくれない？」
「イエス　ミス・美神。」
　マリアは、その足に付いたジェットで空を飛び、上空で我々の行動を見ていた。

「ん？早かったわね。どうだったの？」
「ドクター・カオス、潜入完了。」
「ああ。あいつらの騒動だったの。」

「他に変わったことは？えーっと、そうね。他の兵はカオスたちのところに行こうとしているのに、全く移動しない兵とか何か別のところへ連絡を取っているような兵とか。」
「移動しなかった兵　門や聖堂：各３名　美術館：１８名　…」
「なるほど、美術館か。行くわよ、おキヌちゃん。マリアは、カオスたちにそのことを伝えて。」
「イエス　ミス・美神。」

「あそこね…確か、あそこは…なるほど、あそこは地下があるから、たぶん、そこから、モリアーティの本拠地にはずよ。」
「ほんとに、横島さんたち待たないで行っちゃうんですか？」
「ちゃんと伝えたし、大丈夫よ。」

エピローグ

現代…

「さあ、仕事は終わったわ。報酬の方は？」
「ちゃんとあるわよ。」
「ママ！」
「でも…私が、あなたたち不在の間、ここの事務所管理してたのよ。ひのめの世話もあるっていうのに。ってことで半分は私が…」
「エ！ちょっと、ママ…」
「美神さん、いいじゃないですか、半分でも十分な額でしょ？」
「じゃあ、半分で納得しろって言うんなら、あんたの給料も半分するわよ。」
「いや、それ、俺死んじゃいますって！」
「フッフッフッフ…」
「美神さん？」
「フフフフ…」
「おーい、美神さーん？」
「フフフ…」
「ダメだ、完全に、ヤられてるよ。」
「…こんなこともあろうかと、もう一つ収入源用意してあるのよ。」
「もう一つですか？」
「ワトソンがね、どうしても、モデルにしたキャラクターを書いてみたいって言うんで、モデル料はらわせたわけよ。」
「小説のモデル料って、鬼ですか？」
「いいじゃない。向こうも承諾したんだから。」
「で、いくらもらったんですか？」
「これからよ。」
「え？これから、過去行ってもらいに行くんですか？それとも、ど

こかに埋めてあるとか？」
「バカね。原稿よ。今回の話をワトソンに速急に小説にしてもらって、マリアに打ってもらったの。急いで書いたものだし、ワトソンが知らない部分もあるから、私が手直するつもりだけど。その原稿料は私のものよ。ワトソン最後の作品よ。売れるの間違い無いわ。」
「俺、売れないと思いますよ。だって、コナン・ドイルによる手直しないんでしょ？それに、ホームズやワトソンはいないってことになってるんですから、いきなり、ワトソン最後の作品って言われたって…」
「何？じゃあ、これ、無駄ってこと？…あそこでのマイナス考えるとさ、今回のって、タダ働きどころか、赤字じゃない！」
「そうなりますね。」
「…こうなったら、マイクロフトでもイギリス政府でも強請って、金を…」
「やめましょう。美神さん、それ絶対消されますって。」

エピローグ（後書き）

先にエピローグ出来たので。

その13

ヴァチカン美術館…

「本棚の本を動かせば、隠し階段って、古典的よね。」
「古典的って…私たち昔にいるですし。」
「いい？おそらく、この下は、研究施設よ。おキヌちゃんは、ネクロマンサーの能力使って、霊たちを解放するだけでいいから。」
「わかりました。」

「うおおお…おっさん、前はどうやって逃げたんだよ？」
「前来たときは、攻め落とす目的のほかに、魔法道具を奪うという目的もあったからの。その魔法道具の１つの魔法のほうきでスイーッと逃げたわけじゃ。」
「ああ、こんなとき、マリアがいれば…」
「おお、噂をすれば…おーい、マリア、ここじゃ。」
我々は、マリアとピートによって、何とか、その場から逃げることに成功した。

そして、美神とキヌの待つというヴァチカン美術館へ我々は向かった。

「ゴーストスイーパーが侵入したという報告は受けてある。お前たちがそれだな？」
美神たちを待っていたのは一人の女性であった。
「…？妖力を感じない。…人間なの？」
「その通り。私は、フォン・ヘンダーの娘だ。…ただし、普通の人

間ではない。」
その女性は、うなり声をあげながら、姿を変えていった。
「何？人狼？」
「違うな。人狼の細胞を移植させてもらったのだ。」
「人間と妖怪のキメラってことか…」
「そうだ。おかげで人知を超えた力を手にすることができた。」
「初期段階でこの実験って、奥ではもっとすごい実験をやってるみたいね。確かに、そんな軍がでてきちゃたまったもんじゃないわ。…狼の改造人間って、ゾル大佐じゃないんだから！…おキヌちゃん、護符を！」
「はい！」
護符が女性の体にはりつき、動きが鈍くなったそれを美神が貫いた。

その14

ヴァチカン美術館地下…

パチパチパチ…

美神たちに、どこからともなく、ある男の拍手が鳴った。

「誰！？」

「いやいや、見事なものだ。ホームズくんより先にここに来たこともさることながら、その霊能力…」

「何が言いたいの？」

「簡単に言うとだね。私の実験にピッタリだということだよ。」

男が指を鳴らすと、そこには、黒い巨体が一体…

「何なのこれは？」

「…ヨルムンガンドを知っているかね？」

「フェンリルの弟で、蛇の悪魔でしょう？」

「…では、ミノタウロスも知っているだろう？」

「…牛の悪魔…正確には、死にかけた牛の悪魔がすぐに転生するために、自身の霊力全てを代償に生ませた子供。」

「その通り…神話は違うが、双方とも実在した。悪魔とは、神に近い妖怪。…私は思うのだ。彼らは、ただ、産まれてくる時代を間違えただけだと。…私がそうであるように。そこで、私は、彼らの遺体や残された霊片などを書き集め、蘇らせた。なかなか正常なものが遺されてなくて二体分でも一体作るのがやっとだったが、彼らは新たな悪魔スパーラとして蘇ることができたのだ。」

「悪魔を改造するなんて、恐ろしいマネを…」

「私と話しているヒマはあるのかな？」

スパーラの攻撃が、美神とキヌに向けられた。

「こいつ、悪魔、2体分の力はある！」

「では、私は、別の場所で見学させてもらうとしよう。」

「こいつら、全員、動物霊と融合している！」
「ここは、僕が…」
「いや、俺もやろう。いでよ、懐かしのハンズ・オブ・グローリー…」

その15

ヴァチカン美術館…

「俺の必殺技・パート1！」
「ダンピール・フラッシュ！」
「俺の必殺技・その35！」
「…ハアハア、何とか、倒しきったようですね。」
「っていうか、カオスのじいさんも、魔法陣で戦えるんじゃねーのか？」
「いやー、疲れるからの。」
「ここまで来ておいて、そう理由で断るのか。」

「ック…おキヌちゃん、他にアイテムは？」
「それが、もう…」
「悪魔って意外と強かったんですね。」
「…そうよ。子供を狙ったり、夢で人質をとったりするから、イメージ無いかもしれないけど、そんじょそこらの妖怪とは格が違うわ…って、横島くん、いつの間に！」
「やっと、追い付きましたよ。…美神さん、ここは、もう、あの合体技しかないのでは？」
「ライダーネタで引っ張ってるからって、ふつうの人間のダブルキックで倒せると思ってるの？」
「いや、そうではなくて、アシュタロスを倒した方のですよ。」
「ああ、そっちの。…いえ、それより、あんた、文殊のストックって持ってきてある？」
「ありますけど、4つだけですよ。さっき、1つ出したから、もう出せても、残り2つが限度でしょうし…」

「それだけあれば、十分よ。」
美神は、３つの文殊に念を込めはじめた。
「鉄…牙…砕…？何ですか、これは？」
「いいから、横島くんは、ハンズ・オブ・グローリーの準備を…」
「またですか？…ハンズ・オブ・グローリー！」
横島の出した険に、美神は、３つの文殊を加えていった。
「ああ！俺の腕が、鉄砕牙に！」
「やっぱり、媒体があれば変化するのね。」
「なんてことしてくれるんですか？」
「大丈夫よ…（たぶん…）ちゃんと戻る（はずだ）から。」
「確信持って言っているようには…」
「ほら、行け、横島！」
「…でも、こんなショックな体では…」
「何？このまま行かないのと行くの、どっちが怖いかわかってんの？」
「ああ…孫悟空でも犬夜叉でも無いのに、従っている俺って…えーい、どーにでもなれ、風の傷！」

その16

真っ二つになる悪魔…

「ああ、よかった。腕が元に戻った。」

「エ！（もう！？よかったわね。）ちっ！あのままなら、鉄砕牙が手に入ったものを…」

「美神さん、本音の方をしゃべってませんか？」

「やーね。冗談よ。冗談。」

「さて、コイツらもちゃんと除霊してやっとかないと…」

美神の札の力とキヌのネクロマンサーの笛の力で、その肉片は、消えていった。

「ったく、今回の仕事…悪魔との闘いだけでもこれだけの披露…１０億でも割にあわないわね。帰ったら、しっかり、請求しなきゃ…そういえば、横島くん、他のやつらは？」

「あ！何か、ホームズさんが、美術館で他の通路をいくつか見つけて、そちらの道を探すことになったんですが、美神さんたちは、この道を通っただろうってホームズさんが…」

「へー…ん？ってことは、ここは行き止まり？」

「いえ、ホームズさんが言うには、この道もちゃんと奥まで続いているそうです。」

「じゃあ、なんで、別行動してるの？」

「事件の黒幕が奥にいるとは限らないからしいですが…」

「そう…確かに、一理あるわね。でも、これくらいの化け物がいる場所…危険ね。とりあえず、わたしたちは、奥に向かいましょ。」

「なんじゃ、ここは？」

「おそらく、実験に失敗した被験体や材料として使い終えた妖怪を

置いておく場所なのだろう。」
「ク…ひどいことを！」
「ひどい？そうかね？私はそうは思わないが？」
「モリアーティ教授！」
「ほう…かつての面影が残っていたのか、うれしいかぎりだな。」
「その姿は一体？」

その17

そこにいたのは、あのモリアーティ教授であった。

しかし、その姿は、頭部と右足を除いて、そのほとんどが人外に変わっていた。

「その姿は、一体？」

「吸血鬼となり、君と闘ったあの日、私は死んだのだ。…いや、死ぬはずだったと言うべきかな？吸血鬼の再生能力と私の生への執着で…私は死を免れた。…だが、再生能力があるといっても、あの状態では限界に近かった…私は、自身の研究施設を廻り、妖怪の肉片などをかき集めた…なんとか、生き延びることができたが、この様だ…この体のせいか、今では、半月寝て、半月起きているような暮らしでね…」

「それで、わざわざ、モラン大佐が指事を…」

「ああ、だが、彼が死んでも、組織に支障はないよ。そして、私が死んでもね。」

言うなり、モリアーティは、飛びかかってきた。

狼のような爪を唸らせ、吸血鬼のような牙を光らせながら…

「らしくないな。いきなり、自分で来るなんて…」

「自分の体の半分以上が妖怪なのだ。それに、昔とは決定的に違うものがあるのだよ。」

「…まさかとは思うが、完全な後継者でも見つけたか？」

「ああ、その通りだ。…やつなら、組織を保っていける。」

「それで、自分は捨て駒なるつもりか？」

「この姿は嫌いだが、生憎、君たちに、負ける気もないよ。」

「フッ…お前は、ここに、ピートくんやマリアがいることを忘れているようだな。」

「ダンピール・フラッシュ！」
「ロケット・アーム！」
マリアとピートの技が、モリアーティにむかった。
「いや、忘れているのは、君たちの方だよ。私が、モリアーティということをね。」
モリアーティは二本の腕でそれを防いだ。
二本の腕の外装は、はがれ落ち、その中から機械の腕が現れた。
「魔法科学…君の研究資料は、実に役にたったよ、カオスくん。」

その18

ヴァチカン美術館地下…

「…ほんとうに、ここまで辿りつけるとは…」

「え？こいつなんですか？なんか、ショッカー首領って感じより、死神博士って感じしますけど？」

「いいのよ、ライダーネタは！それに、あんたは、微妙なネタばっかり言って！さっきの「その３５」だって、電王かと思えば、実はらきすたのコスってオーマイハニー！からの二次パロディなんて、誰もわかんないし、死神博士なんて、古くて、誰もわかんないわよ！」

「自分だって、ゾル大佐って言ってたじゃないですか！それに、死神博士なら、けっこう人気ありますし、ＴＨＥ　ＦＩＲＳＴとかも出てるんですから、大丈夫ですよ。」

「パロディとかは、もう、ハヤテとかケロロとかが細かくやってるから、もういらないのよ！せめて、作者のこと考えて、ウルトラマンとかにしなさいよ！」

「いやいや、それこそ、知りませんって。Ｎプロジェクト失敗したんですし。」

「また、あんたは余計なことを…まあ、確かに、アクション込みなら、等身大ヒーローの方がパロディしやすいのはわかるけど…」

「でがしょ？」

「だからって、いちち入れなくていいのよ！」

「いや、こっちが入れなくても、相手の方が入れてくる可能性も…」

「なわけないでしょ！まだ、サイボーグってアイデアすら無いこの時代に！」

「いや…今じゃ定番ですけど、総統や首領がやられた後に基地が崩壊するとか、首領の声が同じとかあるんじゃないですか？」

「声が同じって…まあ、基地が崩壊するくらいなら確かに…って、もし、それ当たってたら、とんだネタばれじゃない！」
「あ…そうなりますね。」

「…話は終わったかな？」
「あ！待っててくれたんだ。」
「けっこう、いいやつかもしれませんね。」
「なに、どうせ、死ぬんだ。心残りが無い方がいいと思ってね。」

その19

モリアーティアジト…

「ワシもなめられたものじゃ…ここは、マリアとワシだけでよい。」
「いや、モリアーティだけは僕が…」
「何を言っておる？お前は、これまで2度もしとめそこなっとるんじゃろ？お前の心のどこかで、この闘いを終わらせたくなとでも思っとるんじゃないのか？」
「…わかった。ここは、任せよう。」
「行け、マリア。本物の魔法科学というものを見せつけてやれ！」
「イエス、ドクター・カオス。」

マリアとモリアーティの攻防が続く…

「いい判断じゃ。」
「ホームズくんは、若い頃、私を家庭教師につけたことがあってね。そのせいか、彼の考えはよくわかる。」
「ほう。奇遇じゃな。ワシも、ホームズを生徒につけたときがあった。」
「彼は、自分の考えが読まれていることにすら気付いておらんのだろう。マイクロフトも私も、ホームズより頭脳が上なのではなく、幼い頃をよく知っているだけにすぎん。結局、そこまでの男にすぎん。」
「…そうかな？」
「ほう？「違う」と言うか？面白い、久々に意見が分かれた。」
「別の人間、意見が分かれるのは当然じゃろう。」
「何が「違う」？何が間違っていた？」
「アレは、ワシが認めた頭脳…その全てを読み切る者など、おらん

はずだ…」
「何を言うかと思え…ば…」
そのとき、一発の精霊石の銃弾がモリアーティを貫いた。
「あなたは読んでいたんじゃないですか？」
「何を言うとる。こうなる可能性は考えることができたが、お前の行動なぞ、読めんわ。」
「そうですか…どうしても、モリアーティとの決着は自分の手でやっておきたかったので。」

その20

モリアーティ基地地下…

「ハアハア…やっと、追い付いた…」

「こんなに広いとはのう…」

「ほう…あなんたがたも来ましたか…」

「モリアーティ！…バカな、今さっき…」

「あなたがたが来たということは、父も敗れましたか…」

「父だと？」

「ええ…私にも実感はありませんがね。かつてイタリアに栄えたある貴族…私の母はそこの末裔でした。」

「美神さん、コイツ、回想入ろうとしてますよ。」

「長くしないでほしいのにね。」

「…母が父と出会ったのは、父が『小惑星の力学』という論文を発表した頃です。父の天才的な魅力に母も退かれていったのでしょう…」

「こっちは、「そんなの関係ねー！」って感じなのに、まだ話してますよ。」

「確かに、いらないわね。何？イタリア系貴族って、ハンニバルにでも話つなげる気？」

「二人とも、待ってもらったんだし、少し待ちましょうよ。」

「父はその後、母が身籠ったのを知ると、母と私を捨て、消えてしまいましたが…」

「ハンニバルにつなげる気なら、こいつの子供がハンニバルってことになるんでしょうか？」

「いや、こいつにも息子がいて、その息子の息子、つまり、こいつの孫がてこともありえるんじゃない？」

「親子というものは似るもので、父を知らずに育ってきたはずの私も、いつしか、ここで犯罪組織を立ち上げてました。」
「どっちにしても、ハンニバルがモリアーティの血をひいていたってオチになりそうですね。」
「でも、それやってしまうと、ハンニバルの犯罪起因が過去のトラウマとかじゃなくて、血が原因だったってことにならない？」
「…そんな中、私はあるとき、父の存在を知った。母を捨てた結果がアレ…私は、復讐に燃えた。」
「いや、それもアリじゃないですか？ハンニバルの犯罪の原因が、過去のトラウマっていうのはミスリードであって劇的に復活するとか、それまで人間の脳を食べていたのも血を入れ替えようと努力しようとしての行動だったとか？」
「ダメね。だって、ミスリードでの結末を一回書かれちゃってるでしょ？スケキヨ然り、ミスリードでは終わらないものよ。」
「すぐに、父を殺そうと思った。だが、私はいつの間にか、父を理解していた。そして、父の偉大さも知った。」
「確かに、スケキヨ逮捕で終わってたら、わかりやすすぎですもんね。」
「そうよ、ああいうのは、逆に怪しくないものなの。」
「そこで私は、父が母を捨ててまで残そうとした犯罪組織というものを護る事を決意したのだ。」
「…で、なんで、ミスリードの話になったんでしたっけ？」
「ま、いいじゃない。向こうも終わったみたいだし。」

その21

ヴァチカン美術館地下…

「シャーロック・ホームズ、君のような頭脳は父にとっては楽しみでも、私にとっては障害にしかならない。ここで死んでもらおう。」
「まだ戦力が残っているとでも？」
「ああ、残っているさ。私や父がどうやってこれだけの妖怪を集めたと思う？1匹や2匹なら、囮や餌で私たちでもなんとかなるかもしれないが、その道のプロならば、それよりも効率的な方法を知っている。」
「まさか…」
「そう、私の部下にもゴーストスイーパーはいてね。君たちの相手もしてもらおうと思うんだが。」
「バカな、ゴーストスイーパーがこんなことに協力するなんて…」
「意外といるものなのだよ、金で動くゴーストスイーパーというものは…」
「ま、まさか、美神さん…」
「ち、違う、私じゃないわよ。」
「ヴァチカン専属のゴーストスイーパーとして動いてくれたのも彼でね。来い。」
「こんなとこまで踏み込まれるとは…一体、どんな警備をしてたんですか？」
　その声とともに、突然出現した魔法陣の中から、一人の男が出てきた。
「ああ、確かに、強い霊力や妖力の持ち主が多くいますね。しかし、それならそうと、もっと早く呼んでくだされば、いいものを…契約をお忘れですか？」
「私も父も、あいにく、従うということを知らないのでね。」

「まあいいでしょう。そちらに少量の損失は出ましたが、計画自体に支障はないので。」
「何？こいつ…妙な妖力を感じる…。まさか、魔族！？」
「やはり、気付かれましたか…」
「私の名は、マ…いえ、やめておきましょう。どうせ死ぬ人間だ。」
そう言うなり、床から土角結界が出現した。
「え？何！？いきなり？」
「時間の無駄なのでね。…それに、契約を犯したモリアーティも消しておきたかったので。」
「まさか、魔族がからんでいたなんて…」
「まさか、土角結界だなんて、これじゃあ、動くことができない。」

その22

モリアーティ基地最深部…

「あんた、動けても、あのネタするだけでしょ？」
「ああ、もう死ぬんや。こんなんばっかりや。」
「そうだ！こんなときこそ、カオスやピートに…」
「無理ですよ。その二人が未来まで無事ならともかく、土角結界にやられるんですから。未来では、いきなりその姿が消えて、それどころか、その記憶すらも消えてしまうでしょうから。」
「じゃあ、二人連れてきた意味が無いじゃない。だいたい、あんたが変なツッコみいれなきゃ、誰も気付かずにそういう展開になったかもしれないじゃない。」
　そのときであった…
「！…土角結界の一角が壊れた！」
「誰？」
「…私だ。」
「…モリアーティ！」
「死んでなかったのか…」
「ホームズ君、君は甘過ぎる。いや、それは、私もか…所詮、私も人の親だったのだからな…」
「モリアーティ教授が土角結界の効果を一身に集めている…」
　あやうく、土となるところだった我々を救ったのは、あのモリアーティであった。
　我々が、元の状態に戻ったとき、モリアーティの体のほとんどは土へと変わっていた。
「た…たすかった…」
「君たちを助けた代わりとして、息子を逃がさせてもらおう。」
　ここへ来る前に装置を作動させておいたのか、基地内にある隠し

扉は全て開き、モリアーティの息子はその中のどれかへと入ったのか姿を消していた。
「君たちも、早く逃げた方がいい。相手は魔族だ…息子だけでなく、君を助けることができてよかったよ、ホームズ君。…私の人生にとって君は最高の宿敵だった…」
「話はそれくらいにしてもらおうかな…」
土になりかけのモリアーティの体を魔族の腕が貫いた。
「そうくると思ったよ。…私は、息子ですら知らない君の正体を知る唯一の人間…神族からの命令を遂行する魔族ということや金銭集めのために人間に化けゴーストスイーパーと偽って地上で暗躍していることなぞ、知られてはまずいだろうからな。しかし、私に妖力を吸う能力を与えたのは誰だ？」
「貴様、こうなることを考えた上で…」
「さすがに、殺せぬだろうが、足止めくらいはさせてもらう。」
「死ぬつもりか？」
「元々、私は死ぬはずの人間だったのだ。あのライヘンバッハの滝でね…」

その23

ヴァチカン内部…

我々があのモリアーティのアジトを脱出したちょうどその頃、ヴァチカンに小さな爆発音が上がった。

それによりヴァチカンに捕らえられていた妖怪や魔物が逃げ出すなどということはなく、私は安堵を感じていたが、ホームズは違った。

何か大事なものを失ったかのようなそんな表情をしていた。

「さあ、これで全て終わったわね。」

「…カオスさん、一つ依頼してもいいでしょうか？」

「何じゃ？」

「しまった！」

「…実は、僕の父は、かつてこのヨーロッパを騒がせたブラド一伯爵なんです。」

「知っておる。」

「…そこで、カオスさんに父を倒してほしいのですが。」

「何故じゃ？」

「父は、まだ世界征服などを望んでいます。我々は平和に暮らしたいというのに…そこで、父の復活の前に。」

「わかった…」

「ダメよ。いい？後々、ブラド一は倒されるの。あたしやカオスによって。そのときの経験が未来にどう影響していくかわかってるの？」

「それほど問題にはならんじゃろ？どうせ討ったのも、復活する前かその直後じゃろうから、ヤツが完全に力を取り戻す前ということになる。じゃとすれば、苦戦の理由はヤツに操られた者たちによる

抵抗、物量に押された経験などはそこまで反映されんものじゃ。それに、操られた者が出ていたとすると、最後のブラドーとの勝負は、味方の吸血鬼…おそらくは、ピートに任されたんじゃろう？そんな経験が何の役に立った？」

「うっ…横島くん、ちょっと…」

「何ですか、美神さん？」

「あんた、フォローしなさいよ。」

「無理ですよ。相手は、俺たちを未来に返したこともある科学者ですよ。それなりに、時間論心得てるみたいですし、H・G・ウェルズのタイムマシンとかも販売された後の世界ですから、より明確にあのときの事理解してるんじゃないですかね？」

「確かに、あのときすでに未来って概念が理解できたんだしね。」

「それよりも、もう一度一緒にブラドーを倒した方がよくありませんか？今眠ってるんですし、数は前より少ないですから報酬も上がるでしょうし。」

「あんた、いいいとこ突くわね…それにしましょう。」

「私たちも手伝うわ。何たって相手は、あのブラドー伯爵よ。人数は多い方がいいでしょ？」

その２４

ブラドー島…

「け、結界が壊されている！」
「まさか、この島に誰かが侵入を！？」
「あー、すまん。それ、俺がやったんだ。お前探しにこの島に来たとき…」
「何やってんですか！？せめて、元通りにしてくださいよ。誰か入ったら、どうするつもりですか？」
「しかし、ブラドーの結界を破るとは…」
「ええ、確かに、僕でもこれほどには…あ！皆さん、もうすぐ、着くので降りる準備を…」
「待って！本当に、この島に侵入者がいるかも…」
「え？俺たちのことですか？」
「バカ。感じないの？この妖気を…」
「そう言われれば…」

「…あなたたちも私の正体を知ってしまいましたからね。」
「お前は…」
「私の名は、マモン。魔族の殺し屋と言えばいいでしょうか？」
「マモンじゃと？道理で…」
「モリアーティには恐れ入りましたよ。あやうく、怪我するところでしたよ。」
「そんな大物の魔族が、神族と組んで何を？」
「お答えしかねますね。」
「もちろん、ただでとは言わないわ。」
「……い、いや、ここで前払いしてもらえるなら、話した後殺せるとも考えたのですが…神族や魔族おいうものは、どこで監視をし

ているかわかりませんねでね。…入ってくる金の桁が違う。膨大な金の依頼なのでね。忠実にいようじゃありませんか。」
「その気持ちは、わかる気がするけど、ここは是が否でも聞かせてもらうわ。」
「休むつもりでここへ来たのですし、今の体力を考えると、戦闘になるのはさけるべきでしょうね。この場は、アイツとアレに任せるとしましょうか…」
魔族が地面に手をかざすと、そこにいた一体の蜘蛛が巨大な蜘蛛へと姿を変えた。
「土蜘蛛！」
「土蜘蛛って、日本の妖怪では？」
「実際はね。でも、あいつの場合、妖怪を人工的に作っていたくらいだから、蜘蛛に人の怨念や巨大な妖気を送り込むなんてやり方は理解してるんでしょ。」
「そんな、途中の敵で蜘蛛なんて、反則じゃないですか。」
「V3とかスカイライダーとか色々例外あるでしょ？それに、土蜘蛛だったら、仮面ライダーでも仮面ライダー響鬼でも途中からの例の方が多いでしょ？さあ、ごちゃごちゃ言ってないで行ってきなさい！」

その25

ブラド一島…

我々が土蜘蛛と闘っている間に、魔族の男はどこかへと消えていた。

「ウッ！」
「大丈夫、横島くん？」
「横島さん…」
「大丈夫ですか？」
「ええ、大丈夫です…かすっただけなので。」
「あの土蜘蛛、さすがに、簡単に倒せそうもないわね。いったん、退いて体勢を整えましょ」

「お前の全盛期の頃の力を戻してやろう。…さあ、目覚めよ、吸血鬼ブラド一よ。」
「…誰だ？」
「私の名は、マモン。私のために働いてもらおう。」
「断る。余は、誇り高き吸血鬼だ。誰にも従わん。」
「吸血鬼というのは、昔からそうだ。身分を知らん。妖怪の中では秀でているが、それ以上の悪魔やその悪魔の上を行く妖力を持つ魔族を認めていない…少々、格の違いというものを見せる必要があるか…」

「さすがは、マモンの作った土蜘蛛ね。通常の武器じゃ、歯が立たない。」
「み、美神さん…」
「どうしたの、横島くん！？」
「マモンって、何なんですか？」
「あんた、知らなかったの？」
「いやー、流れ壊したら、まずいかなと思って…」
「しかたないわね。いい？七つの大罪はわかる？」
「セブンですね？」
「そう、かつて、あんたが闘ったベルゼブブも、その中の一つ食欲に比肩した者とされていて、けっこう有名なの。マモンの場合は、強欲ね。まあ、これは、これは、人間が勝手に押し付けたイメージっていう部分もあるんだけど、そのときに７つぃかない代表例の１つに選ばれたことからもわかるように、魔界だけでなく、人間界にまでその名を轟かせるほどの力を持ってるヤツよ。伝承が多すぎて、どこまでが実話かわからなけど、恐ろしい力を持っているのは間違いないわ。」

雪之丞サイド　その1

現在…イギリス…

「う…」

「ピートくん！どうしたんだ！？」

「よ、よ、横島さんが…横島さんが死にました。」

「何だって？」

「…何故、西条さん、笑っているのですか？」

「え？いや、すまない。ついね…それで、何で横島くんが？」

「土蜘蛛の毒じゃ。小僧は、毒に犯されながら、土蜘蛛を倒したが、それと同時に息をひきとりおった。すぐに、わしの指事通りに血清を作れ。」

「さて、血清はできたが…」

「僕が行こう。シャーロック・ホームズにも会ってみたいし…」

「待て！…俺が行く…」

「お前は、伊達雪之丞！どうして、ここに、あんたの上司が嫌な予感がするとかで、俺をここによこしたんだ。…横島の死を笑ったお前じゃ、信用できんから、俺が行こう。ホームズが見たいなんて、なおさらだ。」

「いや、あれは冗談なんだが…しかし、隊長が何故、わざわざ…」

「…どうやって、過去へ行けばいい？…時の列車か？…ゴットスピードか？」

「それも知らずに来たのか！？…しかし、隊長は今日本…どうすれば…」

「私が送るわ…」

「隊長！…何故、ここへ？」
「ひのめの世話をシロちゃんとタマモちゃんに頼んできたの。…雪之丞くんと一緒に行くはずだったんだけど、この子、勝手に話終わる前にこっちに向かっちゃって…」
「あの…」
「どうしたの、西条くん？」
「あの二人に任せて大丈夫なんですか？」
「大丈夫よ。ちゃんと、しつけたし…口止めなんてしなくても、あのしつけの後じゃ、恐怖で誰も密告なんてできないわよ。」
「隊長…（性格が変わって…いや、キャラが壊れてる…元々、性格は英語でキャラクター…やはり、キャラが壊れるとはこういう状態か？…いやしかし、あの令子くんの母親、これくらいの破綻は初めからあったのか？だが、弟子だったは全く気付かなかった…いやだが、あの修行…確かに、まさに「鬼」と呼べる恐怖の特訓…あれができた人だ。あの二人にしつけくらいできるものなのか？）」
「西条くん？今、何か、失礼なこと考えてなかった？」
「いえ…」
「そう…まあいいわ。それより、雪之丞くん、時空転移の準備よ。」

雪之丞サイド　その2

現在…

「…というわけで、イギリスへ行ってほしいの。」
「それで横島たちを助けられるのであれば、かまいませんが…しかし、イギリスには、すでに西条さんやドクター・カオスやピートがいるのでは？」
「それでも嫌な予感がするということはそれでも足りないということよ。今、動けるのはあなたしかいないの。」
「…わかりました。それでは…」
「あ！ちょっと、雪之丞くん！？」

イギリス…

「それじゃあ、はじめるわよ？」
「…待ってもらおうか？」
「誰？」
「…あの方の計画を邪魔されたばかりか、せっかく死んだ邪魔者まで助けられては何も意味がなくなってしまう。」
「あの方？」
「おそらくは、美神さんたちが遭遇した魔族を操っていた…」
「父親と同じで、うるさいやつだ…」
「ピート！」
「ここは、我々が。隊長は、雪之丞くんを…」
「お前、あのときの魔族か？」
「ああ。ドクター・カオス、お前も死んでおくか？」
「くっ…」
「…ッチ、機械人形に助けられたか？」

「だが、2度目はないと思え。」
「マリア、ロケットアームじゃ。」
「イエス。」
「効かぬ…お前たち程度の力では、上級魔族のこの私に傷すら付けることもできまい。」
「はああ！」
「…！…妖刀か？…面白いものを使うな…だが、お前たちに私は倒せぬ。」
「なに、わしらは、時間稼ぎじゃ…ピートの安否も確かめたいところじゃが、それより重要なことがあるのでな。」
「重要なことだと？」
「歴史さえ変われば、わしらは助かる。過去でお前を倒すなりすればいいのじゃからの。」
「…過去だと…しまった！…させるか…な！この機械人形、まだ動けたのか？」
「ヨーロッパの魔王と恐れられたこのわしの最高傑作が、たかが魔族の一撃で倒されるとでも思ったか？」

その26

ブラド一島…

「クッ…この私が負けるなど…」
「吸血鬼の力などそんなものだ。…ドラキュラなど人間に敗れ死んだのだ。」
「バカな…嘘だ…」
「嘘ではない。お前が全盛期の力で、私に適わないのが、その証拠…」
「クッ…」
「悔やむことはない。ここに、死んだドラキュラの残した肉片がある。これを食べさらに力をつければ、少しはマシ…いや、少なくとも、悪魔などは超えられるはずだ。」
「お前の指図を受ける気はない。」
「…お前のことは調べさせてもらった…この島に侵入した者の中にある錬金術師がいる。その男の名はドクター・カオス！お前は名前も知らなかっただろうが、お前を弱らせたのは、その錬金術師だ。」
「それならば、なおさら…」
「また負けるのか…その錬金術師は、お前が闘った頃とは違い、人造人間という最強の兵器まで携えているのだぞ？」
「……」
「貴様がこれを食さんというのならば、ここの吸血鬼を皆殺しにしてもよいのだぞ？」
「……わかった。」

「私が全てを終わらせてくれよう。」
「あの声は…！」

「大鷲の健！」
「島村ジョー！」
「一体、誰のことを言ってるんですか？あれは父のブラドーの声でしょ？」
「その通りだ。力がみなぎる。…そうか、血肉か…魔力の多くを移動できたわけは…」
「ブラドーの妖力が増している！？」
「…美神さんは、ブラドーの方へ、俺は土蜘蛛を倒しに行きます。」
「…あんた、仮面ライダーネタのままだからって、毒に犯されながらその敵を倒すていう岬ユリ子のドクターケイト戦的なものを狙ってるんじゃないでしょうね？」
「…なわけないじゃないですか！？すぐに、そっちに向かいますよ。」

その27

ブラド一島…

この島の決戦において、ある歴史では、横島忠夫は、全霊力をそそぎこんだハンズ・オブ・グローリーで、土蜘蛛を切り裂き、それと同時にその毒により死ぬはずであった。

「グフッ…まずいな…もう、長くもなさそうだ。ここは、サイキック・ソーサーの要領で、全霊力をハンズ・オブ・グローリーに移した後、文殊で強化して、一気に勝負を決めるしかなさそうだ。」

「やめておけ！」

「…！…伊達雪之丞！…何故、ここに？」

「お前を助けにきた。…サイキック・ソーサーは、他の部分を無防備にさせてしまう。それにより、お前の毒の進行は加速し…」

「死ぬのか？」

「…解毒剤だ。打っておけ。ここは、俺がやる！…魔装術！」

「おお！アームド響鬼か！」

「いいから、休んでろ！」

「クッ…なんて装甲の厚さだ。」

「…やはり、俺が…」

「下がっていろ、横島！」

「…お前ばっかり、活躍してたら、誰が主人公かわからないだろ？…サイキック・ソーサー！」

小さくではあるが、土蜘蛛に穴が開いた。

「あとは、まかせたぞ、雪之丞！」

「チッ…キーック！」

雪之丞の蹴りが土蜘蛛を貫いた。
「なんて無茶をするんだ…」
「まだ、ピートの父…ブラドーが残っている…それに…」
「いや、ブラドーなら大丈夫だろう。現代のカオスやピートによると、全盛期の力だったため、また、ピートが修行前だったためもあり、ピートだけでは倒せなかったらしいが、マリアなどの力を借りて倒すことができたらしいから。」
「そうか。」
横島は、安堵の表情を浮かべていた。
「おい！大丈夫か？」
「大丈夫だよ、そのまま死ぬようなことないって。」
「いや、お前、歴史変えなかったら死んでたんだぞ？」
「そうか。そうだったな。」
「そういえば、さっき「それに」と言っていたが？」
「ああ…実はな…」
横島が真剣な顔になる。
つられて、雪之丞もゴクリと唾を飲み込む。
「…いいか？」
「ああ。」
「実はな…」
「……」
「まだ、この小説、ポロリどころかパンチらも無いんや！こんなんGS美神やない！今の深夜アニメの水準は無理でも、昔のアニメが打ち切りになったときくらいのものは出せるはずや！」

その28

ブラド一島海岸部…

「あの解毒剤、カオスのおっさんのだったのかよ。大丈夫だろうな？」

「治ったんだろ？」

「ああ。大分調子がいい。だが、あの魔族がまたやってくるとはな…」

「…ああ。だから、過去のこの場で討っておく！」

「大丈夫か？相手の力は、かなりのものだぞ？」

「まずは、やってるさ。…しかし…」

「ん？どうした？」

「いや、過去を変えるだけで助かるのか？」

「お前、俺を助けたんだろう？わからないで助けたのか？」

「過去を変えても、パラレルワールドができるだけじゃないのか？」

「あのな。パラレルワールドとか出てくるのは、ジパングとかカナタとかだよ。もし、パラレルワールド存在してたら、宇宙意志なんてのはあんなときには働かないはずだし、アシュタロスが生き残った未来の方が無数に多いに決まってるじゃないか？」

「そうなのか？」

「ああ。例えば、俺の前世がいた頃の平安時代に行ったことがあった。あそこで、もし、俺や美神さんとかの未来から来たやつが俺の前世の死を阻止していたら？いや、間接的でもいい。俺がメフィストなどに変なちょっかいを出したりして、前世の魂を手放してもらえなかったら？…おそらく、俺は生まれなかったが、過去の平安にそういう事実があったということは残る。本来、そのつじつまをあわせるのが、宇宙意志だ。アシュタロスの場合は、あれをやってしまうと、未来も過去も壊れてしまうためという例外にすぎないんだ。

」
「いつの間に、そんなＳＦ好きになったんだ？」
「好きでなったんじゃない。もちろん、元からそういうアニメとかは好きではあるが、隊長の能力を使えば、美神さんも過去へ跳べるからってことで、過去をあまり変えないために、美神さんや隊長に教え込まれたんだよ。…自分たちはあんまり思い出さないでいいように、人を辞書代わりのように…「あんた、何も入ってないなら、覚えられるでしょ？覚えられないなら、今月給料無し！」って具合に…」
「お前も大変だな。」
「ちなみに、アシュタロスとメフィストとの一件やカオスのマリア姫救出なんてのは、おそらく、俺たちが過去へ行かなくても同じような結果になってたんだと思う。たぶん、あれは両方とも事故によるタイムトラベルだから、宇宙意志がアシュタロスの力を落とすため、もしくは、アシュタロスを倒すときのための修行として、過去へ行かせたんだろう。」
「…」
「それで、時間やタイムトラベルを勉強するとき、色んな作品みたからわかるが、ピートの場合…」
「待て！例の魔物が見つかったぞ？」
「いや、待つのは、お前だって…」
「おい！そこのお前、さっきはよくもやってくれたな！」
「あ！もう出ていってしまってる…仕方が無い…」

その29

海岸部…

「仕方が無い…文殊「無」「音」…」
横島は、文殊のストックを使い、それを雪之丞へ使った。
「ほう。お前か…毒を受けたようにも見えたが？む？そういえば、土蜘蛛の妖気が消えているな。」
「なるほど、お前が倒したのか…そこにいるのはお前の式神か？」
「（魔装術のままとはいえ、誰が式神だ！）」
「ああ。」
「（おい！横島、何故、否定せん？というより、何故、肯定した？）」
「その式神を使って倒したのか…面白い。それで私も倒すか？」
「いや、俺はもうすぐ、さっきの土蜘蛛の毒で死ぬ…そうなれば、この式神も消えてしまうだろう。」
「（こいつ、何か、考えているのか？）」
「ここでお前が死ぬまで闘ってやるのも面白いが、仲間に来れられても面倒だ。」
そう言うと、魔族は、地面に手をかざした。
「オオアリか…こうなったら…」
「（いったい、どんな手を？）」
「サイキック・猫だまし！」
横島は、目くらましをすると、雪之丞を連れ、逃げていった。
「逃げたか…まあいい。私もここを去るとしよう。ブラドーもドラキュラの死肉を食べたのだ。少しは使えるようになっているだろうから、あとは、お前とブラド一だけでいいだろう。」

「文殊「解」…」
「何故、逃げた？」
「今の俺たちの力では勝てるかどうか…それに、そんなことをしなくてもピートたちは助けられる。」
「本当か？」
「ああ。…とりあえず、あのオオアリをなんとかできればの話だがな。」

その３０（前書き）

遅くなってすいません。最近、ドタバタしてたので書けませんでした。

その30

「なら、ここは俺にまかろ！…この技で仕留めてやる。」
「それは、サイキック・ソーサーか！？」
「ああ。昔のお前の技だ。普通なら、この技は防御力を格段に落とす。だが、長い修業で俺は、ついに魔装術との併用を可能にしたんだ。強くなるために。ママへの誓いを護るために。」
「あ〝あ〝…それは凄いが…早くしないと、あの敵が美神さんたちの霊気に気付いたようだぞ。…向こうに被害を出す前に早く倒さねば…」
「焦るな。言っただろ、
「まかせろ。」と。…ハア！」
「サ…サイキック・ソーサーが一段とでかくなった。」
「修業のせいかってやつだ。…さあ、くたばれ、アリ野郎。」
「すごい…一撃で…」
「で？なんで、あの魔族を討たないで、ピートが助かるんだ？」
「ああ、討っておいた方がそりゃ助かる確率は高くなるだろうけど、過去でその魔族まで倒すと、別のやつに狙われる危険性もある。この場合、バック・トゥ・ザ・フューチャーのオチの応用でいいんだ。ピートが倒された現代のあの日に、ピートに防弾チョッキでも着せておけばいい。過去のピートにそれとなく伝えておけばいいんだ。」
「そうだったのか…」
「ああ。あの魔族を今討つのは止めておいた方がいい。今はナメられてでも現代で襲ってもらった方が対策を立てやすいからな。」
「しかし、ピートのような裏技があるなら、時間移動だけでどんな魔族も倒せるんじゃないのか？」
「いや。時間移動は因果律を破壊するから、多用は無理だ。…俺も何度も願ったけどな…未来はすぐに変わり、過去へ行って歴史改変したやつ自身も未来が変わればその存在自体が消滅、もしくは、変

わった未来のそいつになるんだ。……だから、ドラえもんのドラえもんだらけのような状態は無理なんだ。いや、この世界ではということで、別にどこかのタルるートのようなドラえもん否定をしたいわけじゃない。むしろ、作者の椎名はドラえもんをリスペクトしている。」

「どうした！横島？」

「いや…この世界では、過去の自分に起きた影響がすぐに未来の自分に出ている。そういう世界では、未来の自分が過去の自分が会うのがせいいっぱいなんだ。そのもっと先の未来の自分が過去へ来てということ自体もやったことはないがもちろん可能だ。しかし、そいつは、未来の自分…いや、そいつにしてみれば少し過去の自分か…少し過去の自分と過去の自分の歴史が変わるごとに次々と影響を受けてしまうんだ。そして、理論上は、その次々と受ける影響により、存在自体が難しくなる。過去の自分と未来の自分は消えず、そいつだけが消滅する。おそらく、そいつは周りの人間には過去へ行くのに失敗して、消滅したと認識されるのだろう。だが、実際には過去には行けたんだ。」

「つまり、時間移動で同じ人間が存在しても二人までだと？」

「いや、消滅までを考えると、一応、三人までだ。あくまで、この世界ではだからな。バック・トゥ・ザ・フューチャーとかなら、本人同士が本人と認識しあって会うことは、宇宙の崩壊に繋がるとされているし、人間じゃないが、同じものの同時存在なら、おそらく無限に可能だろう。」

「一度しかその過去に行くチャンスが無いのはわかったが、過去を変えることができるんなら、武器を送るなり修業した自分が過去へ跳ぶなりして敵を倒せるんじゃないのか？」

その３０（後書き）

遅くなってすいません。まだ忙しいのは、忙しいのですが、長いこと書いてなかったので。

その３１

「歴史を簡単に変えていいなら・・・ここが、パラレルワールドのできる世界なら・・・これまで、何度、俺がルシオラを助けに行きたかったかわかるか？でも、それをやってしまったら、歴史がどんなに変わるかわかったものじゃない。まして、あの日は、人間だけじゃなく、神魔族に関わるジャッジ・メント・デイだ。」
「しかし、勢力を増やすという目的ならば？」
「どう変わるかわからないところが、時間移動の恐ろしいところだ。もし、復活させたルシオラが人質にとられでもしたら？もし、その目の前でもう一度殺されでもしたら？・・・おそらく、俺はもう戦力になれないだろう。それに、未来から俺が来るということは、勝利を伝えてしまう。もし、そうなれば、少なからずみんな気がぬけてしまうだろう？だから、時間移動なんて方法を使わずにルシオラが戻ってくるならそれでいい。」
「それは成功するのか？」
「それこそ未来から俺が来ないから大丈夫だろう。もし失敗してたら、未来から俺が
「相手を変えろ！」なり
「早く種を仕込め！」なり言いにくるさ。」
「確かに、お前ならばやりかねんな。」

「そろそろ、美神さんたちの方に戻るか。正史なら向こうは無事だったんだよな？」
「ああ。」
「なら、もう問題はなさそうだな。」

ブラドー島…

「むなしい。かつて、私を追い詰めた人間にも、自分の息子にも、私は勝った…いや、勝ってしまった。だが、こんな力を私は求めたつもりはない。」

ブラドーは自分に向け、怪光線を放ち、地面へと落下した。

「私の求めたものは…ただ、楽しめる戦いだった…勝利や征服などは二の次だ。」

「よし。これで、傷口は塞がったはず…妖怪の手術をやらされのは初めてだが、おそらくは大丈夫だろう。」

「なに、ワシの指示があったんじゃ。大丈夫じゃよ。」

「その自身はどこから？」

「手術が上手くいったのは、おキヌちゃんのヒーリングのおかげでしょ？」

「いえ、私はそんな…それにしても横島さん遅いですね。」

「一つ聞くが、あの小僧、毒に耐性でもあるのか？」

「え？どうして？」

「どうしてって、あやつ、あの蜘蛛の毒を受けとったから。」

「へ？」

その32

「そっちも終わりましたか？」
「横島くん！」
「横島さん！無事だったんですね？」
「ちょっと、全然、毒に侵されてなんてないじゃないの！？」
「いやー、おかしーのー。」
「いや、こいつ…本当なら死んでいた。」
「雪之丞！」
「なんであんたがここにいるの？」
「俺に解毒剤を届けに来てくれたんです。」
「じゃあ、やっぱり……」
「…」
「あれ？どうしたんですか？黙って。小説なんですよ。喋らないと出番ないんですよ。だから、乱破の妖岩とか出せないんですよ。妖岩だけ出さないってのはかわいそうだから、乱破自体やらないんですよ。…俺はもう大丈夫ですから。」
「…ったく、あんたがいなかったら、文殊無しでどうやって未来帰るのよ。」
「え！？いや、でも、雷の落ちる場所を予知するなり、方法は色々とあるでしょ。」
「（バカ、横島、そこは空気読めよ。あれは美神さんなりの無事を祝う言葉だろうが、俺でもわかるぞ。）…」
「それに、文殊使い切ちゃいましたし、いない状況とそんなに、そんなに状況変わらないですよ。」
「…え？ちょっと待って、じゃあ、何、あんたの霊力回復して文殊が集まるか私が予知するまでこの時代にいなきゃいけないってこと！？」
「落雷の新聞記事でも都合よくメモ張代わりに持ってればよかった

んッスけどね。」
「なに、人ごとみたいに言ってるの！どうするのよ、この時代のお金もなにもないのよ？」
「それなら、ワシの研究室に来ればいい…使ってない部屋がいくつもあるのでな。」
「いいのか！？」
「……ちょっと、待って。今の状況で、足下を見て、後で膨大な金額請求するなんてことはないわよね？」
「未来まで時間ありますから利子も加算で大変な金額になりそうですね。」
「何を言うとるんじゃ？ヨーロッパの魔王とも言われる男がそんなセコいマネするか！未来で払うとしても軽い礼程度でかまわん。」
「私からもカオスの所を奨めておこう。人間的には信用できないが、その情報網は絶対なもの。予知で場所がわかったときもヨーロッパ内ならその国のどこかにアジトがあるから便利だろう。」
「わかったわ。ただし、ほんとに未来でも礼程度だからね。」
「美神さん、お世話になるのにその言い方は…」

その33

ホームズの元へ来た依頼…それは長い因縁に決着を付けるためのものだった。

「ここにこんな依頼が来るなんてね…」
「昨日話ていたモリワーティの息子からの依頼かね？」
「ああ。情報屋であるシンウェル・ジョンソンに彼の情報を集めさせていたんだが、まさか、彼の方から依頼が来るとは…しかも、厄介な依頼だ。…カオスのアジトはこの近くだったな…」
「まさか、彼らとまた遭うのかね！？」「驚くことはあるまい、霊に関しては彼らの方が遥に上だ。」
「確かに。君が認めるほどの実力の持ち主だ。彼らなら…」

「今さらなんですけど…けっこう広いんですね。」
「そりゃ、ヨーロッパの魔王だもん。それまでのつながりがあるでしょうから、ヨーロッパでは…いや、この時代では金持ちよ。アレなきゃ今でもこっちで豪勢に暮らしていたはずだし…」
「なんじゃ？アレとは？」
「いや、気にしない方がいいわよ。」
「そうそう。未来を知るのは得策じゃないんだぞ。」
「む！？確かに、因果律の崩壊に繋がるからな…ワシとしたことがすまんかった。」
「いや、いいのよ。気にしないで。」
「私語とはいえ、こんなとこで喋った俺たちも悪いし…」
「いい？横島くん、おキヌちゃん、二人ともカオスに余計なこと喋っちゃダメよ。」

「でも、どうしてダメなんですか？」
「一言で言えば、未来に関わるからだけど、もし、優秀なＧＳ探しに日本に来て、そこで美神さんに目を付け、俺の体を手にいれるまでは成功したが結局は失敗した事を知ったらどうする？」
「え？どうなるんですか？日本に来ない場合が１つ。この場合、魔族との闘いはより苛酷なものへと変わる。次に俺の成長を知っている事から俺に標的を変えるのが一つ。俺はたちまちあの体だが、これならまだ、美神さんがなんとかしてくれるなりしてくれるはずだ。」
「でも、今のドクター・カオスも横島さんの実力知ってるんじゃないんですか？」
「いや、それなら一応、ヌルとの一戦のときから知っているはずだ。カオスのことだ、忘れたんだろう。」
「じゃあ、何言っても忘れるんじゃないんですか？」
「確かに、その可能性もある。だが、そんな充用なこととなると、マリアに記憶させるなりなんなりをするかもしれん。過去は慎重に動くべきなんだ。」
「そうよ、おキヌちゃん、だから、カオスには黙っておかなきゃ。過去は慎重に…」
「…み…美神さん？」
「どうしたの？」
「いや、物色しながら、そんなこと言われても、全く説得力が…」
「いいじゃない、これくらい。未来へ行けば時効よ、時効。」
「時効警察も真っ青な言い分ですね。今、現行犯じゃないですか！今回だけは抑えてください。俺がカオスの体になってもいいんッスか！？」
「いいじゃない。不老不死の体に、底の見えない煩悩…無限の文殊が作れそうじゃない…今回のブラドー討伐のギャラって、あの国宝級の宝だけよ。あの依頼が無くなるわけだから、私はあのギャラ分、ただ働きしたことになるのよ。これくらい、いいじゃない。」

「ちょっと、美神さん！」
「冗談よ。助手がカオスの体してたらさすがに気使うわ。」
「（いやー、美神さんなら、こき使う。新事務所のときのこともあるし…この人の辞書に気を使うなんて言葉はない！）…」
「何？なにか、嫌な想像してない？ほんとに持って返ってもいいし、なんなら話してもいいのよ。」
「（い、いかん。どこぞの超能力者でもないのに思考を読んでいる！考えを改めねば…そうだ！意外と気は使う。小竜姫様とかの神様とかには気使ってるし、冥子さんとかにも気は使ってる。厄介ごとを回避するためなら、気は使う。）…」
「…」
美神の拳が横島の顔にめりこんだ。
「何故、殴るんでせう！？」
「…そういえば、雪之丞は？」
「散歩に行くって言って出かけましたよ。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0362d/

シャーロック・ホームズからの依頼

2010年10月11日04時08分発行